

## 1 ゼンソウ(スカンクキャベツ):発熱して虫を呼ぶ花:生存戦力(発熱)



ゼンソウは、六ヶ所村では、普通に平地で見られる。仏像の光背に似た形の花弁(葉の変形)が、僧侶の座禅を組む姿に見えることから名づけられた。寒い地域の山岳地帯に生育し、開花は、2月下旬から3月中旬である。開花する時に、肉穂花序が約25度まで発熱し、悪臭迄放ち、この時期の昆虫(ハエ)を独占し、受粉の確立を上げる生存戦力を取っている。花が終わると新緑の葉が芽吹く。

## 2 ミズバショウ:春の到来を告げる花:水質浄化植物



花序:雌しべと4本の雄しべ。50から300個の小さな花の集合体

湿地に自生し、純白の仏炎苞と呼ばれる葉が変形した苞を開く。仏炎苞の中央の円柱状の部分は、小さな花が多数集まった花序である。和名の「水芭蕉」は、葉の形がバショウ(芭蕉)の葉に似ていて、水辺に生えることに由来している。北海道と中部地方以北の本州の日本海側の山地帯から亜高山帯の湿原や林下の湿地に分布する。開花時期は、4月から5月で、葉は花の後に出る。根出状に出て立ち上がり、長さ80cm、幅30cmにもなる。この花には蜜はないが、甘い香りがする。主にハエが花粉を運ぶが、何を目当てにくるか、わかっていない。六ヶ所村では、村内の多くの湿地や扇状地の湧水周辺にもみられ、河川や沼の水質を浄化する植物としても、注目を集めている。

## 3 ヤドリギ:他の木に寄生する木(種を鳥に運ばせる)



ヤドリギの葉は、厚くて硬く、耐寒性が高いので、氷点下の気温でも生き残ることができる。特に寒い季節には他の食物が少なくなるため、ヤドリギのうすい黄色の果実は貴重で、鳥がヤドリギの果実を食べ、その種子を消化しないまま糞として排出することで、広範囲に広げる生存戦力を取っている。

ヤドリギの種はねっとりした粘液に包まれていて、種子を排泄するとき、粘液が糸を引いて近くの枝にくっつきそこで発芽する。木の表面にしっかりと張り付くことができる。

## 4 タンポポ:在来種と外来種の戦い?:クローン繁殖できるのはどちらだ?



在来種のタンポポ



セイヨウタンポポ

在来種のタンポポは、夏場には葉を枯らし休眠し秋に再度葉を展開し、ロゼットで冬越しする。ライバルのいない時期の春先に花を咲かせ、虫たちを独占するために、群れて咲いて交配しタネを飛ばす。これが、在来種のタンポポの生存戦略だ。

セイヨウタンポポは、受粉しなくても、一人で咲いても種を作り子孫を残せる。つぼみの上半分を切っても、雄しべや雌しべがなくても、実がなるそう(田中肇 2000)。クローン種(クローン繁殖)で増えることができるので、路地やアスファルトの道路わきでも一年中咲いていて、どんどん増えていく。一人でクローン種を作れるようになったのは、氷河期の時に昆虫がいなくなったからのものである。これも生きていくための生存戦力だ。花粉が必要な在来種のタンポポ(カントウタンポポ)の結実率が約70%なのに、セイヨウタンポポは約96%で、在来種のタンポポに優っている。在来種のタンポポの姿が見られなくなるわけだ。

## 5 青森ヒバ:親木が幼木を育てる



青森ヒバのヒノキアスナロは、北方系のヒバで、青森県内のヒバは、青森ヒバと呼ばれ、県の木に指定されている針葉樹。「親木が、幼木を守り育てる。種が発芽して、大木の周りの幼木は育つが、日の光がよく当たるところで発芽した幼木はすぐに枯れてしまう。日の光が当たらないのに、幼木が育つのは、それぞれの木の地下茎が菌糸(菌根菌)でつながり養分をもらっているからだ。」(元横浜営林署職員:木村豊春さん談)

## 6 キクザキイチゲ:白とうす紫の色:有毒?



北海道、本州の近畿地方以北に分布し、落葉広葉樹林の林床などに生育する。高さ10-30 cm。花期は3-5月で、白色~紫色の花弁状の萼片を持つ花を一輪つける。花弁はない。キクに似た花を一輪つけることからこの名がついた。

春先に花を咲かせ、落葉広葉樹林の若葉が広がる頃には地上部は枯れてなくなり、その後は翌春まで地中の地下茎で過ごすスプリング・エフェメラルの一種。一年中休眠中の花。キクザキイチゲはキンポウゲ科の植物で、有毒。皮膚炎や胃潰瘍を起こす可能性があるため食用は避ける。

## 7 エンレイソウ:命ながらえた人がいた?他にオオバナエンレイソウ、ミヤマ(シロバナ)エンレイソウ



エンレイソウは根を茎のように延ばして広がっていく。根茎で生長していく植物で、この根茎から3~4月、芽が出始め、茎が伸びる。茎が20~50cm伸びて、先に葉を3枚つけ、葉の形は丸い菱形で直径15cmほどに広がる。中国ではこのエンレイソウの根を「延齡草根」と呼び、民間薬として用いられている。腹痛や食あたりに胃腸薬として、また、高血圧や神経が弱っている時などに乾燥させた根を煮出して飲む。このように薬として用いられて胃腸などの症状が治り命ながらえた人がいたことから延齡草と呼ばれてきたようだ。諸説あり。

## ★ タデアイ:水生植物であるタデアイは浄化に最適 ~藍染めを特産品にできないかな?~



タデアイ



ミゾソバ

タデアイ(蓼藍)はタデ科の1年草で、日本には6世紀頃中国から伝わり、藍色の染料を採るために広く栽培された。特に江戸時代にはベニバナ・アサとともに〈三草〉の一つに数えられ、日本を代表する商品作物とされた。阿波国(現・徳島県)で発達し、19世紀初めには藍玉の年産高は15 - 20万俵を誇り、阿波藍として名産品であった。中国東部、朝鮮半島、日本列島中央部において青色の染料として重用されていたが、化学合成したインディゴ染料が発明されて以降は合成インディゴが工業的にはよく用いられているため、染料用途で用いられることはあまりなくなった。

田面木沼の浄化圃場では、同じタデ科のミゾソバが普通に繁茂している



藍染め